

## 研究資料

## 土佐光吉筆「曾我物語図屏風」について

江村 知子

本図は六曲一双屏風の向かって右隻に富士の巻狩図、左隻に曾我兄弟夜討図を表したものである。この作品は宮島新一氏により写真のみによって知られる作品で所在等は不明ではあるものの、土佐光吉の晩年の作として左隻の部分が紹介されている<sup>(1)</sup>。また井澤英理子氏は曾我物語図屏風の構図の成立と展開について論究し、桃山時代に一雙形式が整い、その後江戸時代を通じて多数描かれた中で、本図はもっとも早い時期の作例と推測されている<sup>(2)</sup>。そして近年、所蔵が明らかになった渡辺美術館における調査によって、泉万里氏が本図の構成と図様について詳述されている<sup>(3)</sup>。作品紹介および図様とテキストとの照合については泉氏によって完遂されているのだが、本図は曾我物語図の研究、土佐派研究にとって重要な作例であるのみならず、伝統的やまと絵の近世における展開を考える上でもひじょうに示唆に富む作品であると考えられるため、本号において改めて口絵とともに紹介する次第である。「二巻本」と言われる『曾我物語』、および幸若舞の『夜討曾我』『十番斬』を参照しながら図様をみてゆくこととするが、まずは物語の大略を確認しておく<sup>(4)</sup>。

『曾我物語』は、曾我十郎・五郎の兄弟が、父の仇である工藤祐経を討つという史実に基づき、仇討の遠因、兄弟の成長、仇討の成就、後日談を記したもので、南北朝時代頃までには原本が成立したとされる。伊豆地方の武士であった工藤祐経は先妻との間の嫡男が早世し、孫の祐親が遺された。その後迎えた妻の連れ子であった娘との間に祐継が生まれ、祐親には河津地方を、祐継には伊東地方を所領として与えた。祐継は嫡子・祐経が九歳の時、狩場で倒れ急逝、祐親は祐経の自分の娘と結婚させ、後見を装いつつ、祐経の所領を奪う。それに気づいた祐経は祐親に報復を企てる。狩りに乗じて祐経は刺客を差し向け、祐親の息子である河津三郎を暗殺

する。一方、河津三郎の未亡人・満江御前は、五歳の長男・一万と三歳の次男・宮王（のちの十郎と五郎）を連れて相模の曾我祐信と再婚する。さまざま苦難を経て、二十二歳と二十歳に成長した兄弟に仇討の機会が到来する。建久四年（一一九三）五月二十八日に源頼朝は富士の裾野で巻狩を催した。これには頼朝が武士の頭領となったことを有力な家臣その他の御家人たちが参集して祝祭する政治的意味もあった。さて狩場で十郎と五郎は、祐経を見つけるが、あいにく仇討の好機を逃してしまふ。その夜、兄弟は仇討の宿願を果たす。壮絶な闘いの末に、十郎は討死し、五郎も捕らえられ処刑される、という物語である。

それでは本図の図様をみてゆく。まず右隻（挿図1）は富士山麓での巻狩の様子が見え、その稜線のわきには青空がのぞきみえる。第三扇（挿図1-①）では、傘を差し掛けられた馬上の頼朝とその一行が狩りを眺める様子が表されている。頼朝の左脇には小舎人童の五郎丸が描かれ、『夜討曾我』の「御馬添へには五郎丸、赤地の錦の直垂を下し給て、これを着る。八十五人が力なり。萌黄の腹巻着籠めにし、君を守護し奉る」という詞章に合致する出で立ちで表されている。頼朝の背後には多数の家臣が付き従い、畠山重忠と和田義盛らは、鷹を手乗りさせた騎馬人物として描かれる。「十二巻本」に「数千騎の出立、花をおり、月をまねく粧」とあるごとく、武士たちの装束は精緻に文様が描かれ、鮮明に彩色された華麗なもので、さらに金泥で文様を描き起こす。しかも右隻全体に描かれる八十余名の人物がほぼ全てが異なる文様の装束で表されている。山からは勢力たちが刀や棒で獲物を追い立て、平地で武士たちがおびき出された鹿、猪、兎、狐などを騎射する様子が描かれる。第四扇下方（挿図1-②）には、新田四郎忠常が猪の背に逆さまに乗り刀を突き刺して仕留める姿で表されている。この逸話は「十二巻本」巻八で詳述され、『夜討曾我』では文言は省略されているものの、寛永整版本の同場面の挿図にその姿が示されている。第六扇には工藤祐経が三頭の鹿を追う姿で表されている（挿図1-③）。工藤祐経は重要人物として存在を明示するように集団から遠ざけられて単独で描かれ、「十二巻本」に「その日の装束、花やかなり」とあるごとく、紺地に色鮮やかな上り龍が大きくあしらわれた着物を片脱ぎにした姿で表されてい

る。またその左上の山の稜線には初夏を表す白百合が描かれている。その下方には、物語の主人公である十郎と五郎が表される。兄弟は祐経の姿を見つけ、絶好の機会と見て追おうとするものの、十郎は酷使していた馬が躓いたために落馬し、五郎はそれに駆け寄る姿で描かれる。「十二巻本」において十郎は「村(群れ)千鳥の直垂」、五郎は「蝶を三つ二つ所々につけたる直垂」、という記述通りに文様が描かれている。十郎は好機を逃し、落馬の衝撃で眉間に皺を寄せた表情で、五郎は驚き咄嗟に駆け寄る姿で表される。こうして狩場の仇討は失敗に終わり、物語はその日の夜へ、画面上では左隻に続く。

左隻では十郎が八か所、五郎が七か所、それぞれ描かれているが、いずれも右隻同様に、十郎は水色地に群千鳥、五郎は薄茶地に蝶の文様の直垂に袴姿で表される。兄弟の顔貌については、挿図3、4に一覧とした。場面ごとに多少の相違はあるものの、物語の場面、心情・表情の描き分けと見て大過ないと見られる。<sup>(5)</sup>第六扇最下部(挿図2-①)には、貧しくとも馬の手入れを十分に行うように従者の鬼王丸、道三郎に命じる十郎の姿が描かれている。兄弟は今夜こそ仇討を決行する覚悟であるが、粗末な草の庵に食べるものもなく途方に暮れていると、本懐を遂げるべしと励ます畠山重忠らより食糧の差し入れが届く。第四扇中央土坡の手前(挿図2-②)には長持を竿で担いで来る男達が描かれ、第五扇下方(挿図2-③)では烏賊、鮑、鯛、家鴨などの食材が賑々しく広げられ、兄弟は家紋である庵に木瓜文<sup>(6)</sup>を染めた幕の中で最後の宴を開く。兄弟の表情は寛ぎ和らいだ様子で、緊迫した物語のなかでほんのひとときの安穩を表している。一方、頼朝をはじめ武士の一行は、明日は鎌倉へ戻るとして、第一扇最下部(挿図2-④)には馬の手入れをし、庭乗りする様子が描かれ、また第五、六扇中央(挿図2-⑤)には北条氏と見られる三鱗文の幕が張られた大きな屋形が描かれる。座敷には金地の松図屏風を設え、金時絵の大鼓小鼓を鳴らし、笛を吹き、舞い袖を翻して楽しむという、盛大な様子である。そして十郎は祐経の屋形を探しに行く。第二扇上部(挿図2-⑥)には十郎が自らの家紋と同じ紋の幕を張る屋形を見つけ、中から出てきた祐経の嫡男・犬坊に手引きしてもらった様子が示される。その屋形の座敷(挿図2-⑦)には犬坊と王藤内が同席するなか、祐経は十郎に対して自分を恨むのは筋違いであり、従兄弟甥の関係な

のだから、自分の家臣になれ、と言う。本図において祐経は刀の柄に手をかけながら、身を乗り出して十郎に詰め寄る。屈辱を受けた十郎はその場を堪えつつ祐経への憎しみを新たに、仇討を決意する。第四扇下部(挿図2-⑧)に自分の陣幕に戻った十郎が五郎に偵察の様子と夜討の手筈を伝え、従者には、母への手紙を託し、馬を連れて帰るように命じる。忠実な鬼王丸と道三郎は、最後まで兄弟に付き従うことができないのであれば、と差し違えてその場で死のうとするが、兄弟に止められ、第五扇最下部(挿図2-⑨)には泣きながら兄弟の馬を曳きながら帰路に就く二人の姿が描かれる。

いよいよ仇討の時を迎える。第三扇中央(挿図2-⑩)には用心深く屋形違えをしていた祐経の居場所を兄弟に教える本田二郎が表され、その屋形の端近には白地に赤肩裾模様の小袖の女性が描かれている。この女性は、十郎なじみの遊女大磯の虎の妹で兄弟を祐経の寝所へ導くのだが、「十二巻本」では虎の妹を「黄瀬川の亀鶴」として祐経の屋形内で王藤内の相手をしていたという。ところで、この場面の左下(挿図2-⑪)には、桂巻きをした女性二人が描かれている。「十二巻本」では祐経の屋形に、手越の少将、黄瀬川の亀鶴という二人の遊女がいたとしている。本図の表現だけでは人物の特定はできず、また虎の妹として描かれる女性と同一人物と認められる類似点がないため、後考を俟つことにしたい。さて、第二扇中央(挿図2-⑫)では、五郎の掲げる松明に照らされて、肌も露わに片身を起こそうとする祐経が描かれる。枕元には相応の拵えの太刀が置かれ、応戦しようとするが、兄弟に斬殺される。同じ屋形に寝ていた王藤内は縁側に慌て逃げ出す姿で表される。こうして仇討を果たし、続いて幸若舞「十番斬」、「十二巻本」では巻九「十番斬の事」で述べられる内容に移る。第三、四扇、画面のほぼ中央部分(挿図2-⑬)には仇討を遂げた十郎と五郎は頼朝にも恨みがあるとして白い幕の張られた頼朝の屋形へ向かう。慌てた人々が箆や傘、菅笠にまで火をつけて松明にしながら、刀や槍をもって応戦し、屋形の左側(挿図2-⑭)には繋ぎ馬に乗りながら鞭を打つ者が「十二巻本」や「十番斬」で語られる通りの描写で表されている。この乱闘の中、十郎は新田四郎忠常に斬られ絶命する。第三扇の屋形の中(挿図2-⑮)には白地菊紋で赤い裏地の衣を頭から被った人物が表されており、これは敵を油断させるた

①頼朝の一行

③工藤祐経

②新田忠常

⑤曾我五郎

④曾我十郎

挿図1 土佐光吉筆「曾我物語図屏風」右隻

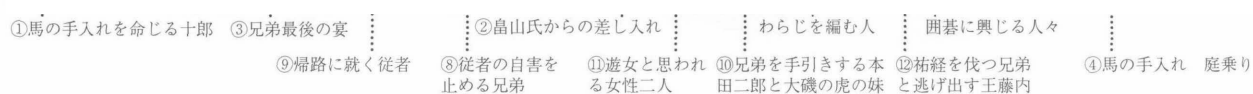
②新田忠常

①頼朝の一行

⑤曾我五郎

④曾我十郎

③工藤祐経



挿図2 土佐光吉筆「曾我物語図屏風」左隻

- 『曾我物語』（十二巻本）、『夜討曾我』『十番斬』で記述されている場面
- 物語の場面として特定できない描写

①部分 仇討

③兄弟最後の宴

⑬部分 頼朝

⑫部分 遊女と思われる女性

⑩部分 大磯の虎の妹

⑤部分 鼓方

⑦左隻第三扇 屋形への侵入

④左隻第二扇 祐経の屋形前

①右隻第一扇 富士の巻狩

⑧左隻第二扇 祐経を伐つ

⑤左隻第二扇 祐経との対面

②左隻第一扇 馬の手入れ

⑨左隻第四扇 十番斬

⑥左隻第四扇 従者の抑止

③左隻第五扇 最後の宴

挿図3 十郎の顔の比較

⑦左隻第二扇 頼朝の詮議

④左隻第三扇 屋形への侵入

①右隻第一扇 富士の巻狩

⑧左隻第六扇 処刑

⑤左隻第二扇 祐経を伐つ

②左隻第五扇 最後の宴

⑥左隻第四扇 十番斬

③左隻第四扇 従者の抑止

挿図4 五郎の顔の比較

めに五郎丸が女物の装束を纏ったもので、五郎丸に五郎は捕らえられてしまう。朱色の補彩によってやや隠れているが、衣の隙間から右目を鋭く光らせて敵の動きを窺っている様子が確認できる。この屋形の右に続く座敷、第二扇中央(挿図2-16)には自らも鎧を着け槍をもって迎え撃とうと頼朝が立ち上がるとうところ、小姓の一法師丸が、すでに將軍となつた頼朝がこのような小事に手を下しては軽率だと諫める場面が表され、その右隣(挿図2-17)には縁に向かい五郎を詮議する頼朝の姿が描かれる。頼朝の面前(挿図2-18)には縄をつけられた五郎が引き出され、犬坊に扇で叩かれる様子が描かれる。周囲には憤怒の表情で縄を手繰る者もいれば、十八年間親の仇討を果たすために堪え忍んできた五郎に同情を浮かべる者も表されている。五郎は勇氣ある武者として讃えられるが、仇の祐経だけでなく他の人々をも殺傷したこと、またここで赦免しては仇討の連鎖を招くとして五郎は処刑されることになる。五郎の傍らには水色の群千鳥の衣に包まれた十郎の首級が置かれている。第六扇最上部(挿図2-19)には刑場である九品の松に引き出された五郎が描かれる。その後、第五扇上部(挿図2-20)には赦免状と見られる文を手にした人を先頭に人々が走り来る様子が描かれるが、五郎は兄・十郎のもとにゆくことを願い、斬首される。

本図は概ね『夜討曾我』『十番斬』および「十二巻本」で語られる内容に基づいて描かれていると言えるが、左隻画中には説明できない場面もいくつか存在する。第一扇最上部の屋形の中で食事をする武士、第二扇最下部の屋形の中で囲碁をする男たち、第五扇最上部の屋形の中で文をしたためる人物、などはその人物や場面設定が現段階では不明である。とはいえ、泉氏が指摘されているように、これらに一部類似する描写が後世の曾我物語図屏風にも確認できることから典拠元となる祖型の存在も考えられる。今後さらに作例を参照検討することによって明らかになるであろう。

最後に本図に見られる表現上の特徴についてふれてこの紹介を終えたい。右隻の山々は緑色を平板に塗り、山間には淡い緑色をぼかし、遠くの木々を繊細に連ねて描かれており、中世やまと絵屏風や絵巻に見られるような伝統的手法で表される。また本号相澤氏論考において指摘されている通り、金泥でアクセントをつけた丸み

を帯びた岩などは他の光吉作品にもよく見られる特徴的表現である。また左隻第一、二扇に描かれる柳を見ると、「源氏物語手鑑」(和泉市久保惣記念美術館蔵)の「夕顔一」、「常夏」や、他の光吉作品に描かれる柳と、しなやかな枝振り、葉の描写、点苔などの表現と近似していることがわかる。また第三扇下部に描かれる枇杷の樹は同手鑑「帚木」や他の屏風作品に描かれる枇杷と、大小三、四枚ずつの葉を組み合わせて表す点が酷似する。さらに左隻第二扇囲碁をする男たちのいる座敷の隅、第六扇三鱗文の幕の張られた屋敷の左側には、立て膝をして居眠りをする男が描かれている。物語の主要人物の傍らで話の筋とは無関係に居眠りをする人物を添える表現は、平安時代の絵巻から認められる伝統的手法と言えるが、他の光吉作品にも少なからずその姿が認められる。

本図には落款もなく現在の所蔵以前の伝来についても不明であるが、本図の良好な保存状態、構図や表現、他作例の類似点から本図が土佐派研究において重要な作例となることは疑いない。山根有三氏は宗達筆「関屋・濤標図屏風」(静嘉堂文庫美術館蔵)と光吉筆「関屋・御幸・浮舟図屏風」(メトロポリタン美術館蔵)との構図の類似、宗達における土佐派絵画の影響について指摘されているが、本図右隻に見られるなどらかな緑色の山の表現は、宗達筆「関屋・濤標図屏風」や「葛細道図屏風」(承天閣美術館蔵)などを想起させるものである。そして本図右隻第五扇上部の山の稜線から鹿を追って五人の勢子たちが人形劇のように並列して描かれるさまは、宗達や光琳の作品に見られる、物語人物をデザインのように配置する手法を予感させる。村重寧氏は琳派の草花図の成立に土佐派の伝統的やまと絵の花木図が大きく影響していることに論及されている。<sup>(9)</sup>山根氏が「金と緑青と群青による表現、これは桃山障屏画人すべてに通ずる問題であり、尾形光琳の燕子花図屏風によって極まったものであるが、光吉もよくそれを心得、相当な成功を収めていると云えよう」と示唆された通り、<sup>(10)</sup>やまと絵の伝統的手法は変容しながらも確実に宗達や光琳へ受け継がれてゆく。近世絵画が展開してゆく一つの方向性を明確に指し示す作例としても本図は位置づけられよう。

- (1) 宮島新一『土佐光信と土佐派の系譜』(『日本の美術』二四七、七十四頁、至文堂、一九八六年。
- (2) 井澤英理子「曾我物語図考―一 双屏風の成立について―」、『日本美術襍稿』(佐々木剛三先生古稀記念論文集) 明德出版社、一九九八年十二月。また曾我物語図の図様や場面選択と、能や幸若舞など芸能との関係については同氏「曾我物語図の系譜における芸能との関連性」(『鹿島美術財団年報』第十五号別冊、一九九八年十一月) において詳述されている。
- (3) 泉万里「曾我物語、源平合戦屏風絵等について」、『財』渡辺美術館所蔵品調査報告書』二〇〇六年八月。
- (4) 「十二巻本」は『曾我物語』(『日本古典文学大系』八十八、岩波書店、一九七九年) を、『夜討曾我』、『十番斬』は『舞の本』(『新日本古典文学大系』五九、岩波書店、一九九四年) を参照した。
- (5) ただし左隻第四扇中央、十番斬の場面の十郎の顔は、明らかに異なる色味の絵具が上から塗られており、後世の補筆と見られる。
- (6) 『夜討曾我』では十郎が工藤祐経の屋形を探す折に「庵の中に木瓜、ありありと打たるは、「爰に庵の中に木瓜、ありありと打たるは、我等が家の紋ぞ」として曾我家の家紋を庵に木瓜とするが、「十二巻本」には「爰に、二つ木瓜の幕打たる屋形あり。誰が幕やらん、これは、我らが家の紋也」として、家紋を二つ木瓜とする。本図においては、類似する簡略な形として庵が山形に表されているとみておく。
- (7) 前掲註(3)に同じ。
- (8) 山根有三「土佐光吉とその関屋・御幸・浮舟図屏風(下)」、『国華』七五〇、一九五四年。
- (9) 村重寧「琳派の花木・草花図の展開」、『瀟洒な装飾美―江戸初期の花鳥』(『花鳥画の世界』五) 学習研究社、一九八一年。
- (10) 山根有三「宗達筆「関屋・滯標図屏風」について」、『琳派絵画全集 宗達派二』日本経済新聞社、一九七八年。

付記

調査・撮影に懇切なるご高配を賜りました財団法人渡辺美術館、事務局長荻原侑一郎氏と同館の方々に感謝申し上げます。本図の口絵・挿図写真は金井杜道氏の撮影による。

土佐光吉筆「曾我物語図屏風」について

基礎データ

土佐光吉筆「曾我物語図屏風」六曲一双 紙本金地着色  
財団法人渡辺美術館(鳥取県鳥取市覚寺堤下) 蔵

本紙寸法(センチ)

左隻	第一紙	二八・三	第二紙	三三・七	第三紙	三三・七	第四紙	三三・八
	第五紙	二五・五	縦	一五五・〇				
	第一扇	五五・〇	第二扇	五五・〇	横	三五八・〇		
	第一紙	二七・八	第二紙	三三・七	第三紙	三三・七	第四紙	三三・八
右隻	第五紙	二六・二	縦	一五五・二				
	第一扇	五四・八	第二扇	五五・〇	横	三五七・六		

図版要項

一一九 土佐光吉筆 曾我物語図屏風 (原色刷)

紙本金地着色 屏風六曲一双 (各) 縦一五五・〇cm 横三五八・〇cm  
鳥取 財団法人渡辺美術館蔵

一一九 江村知子「土佐光吉筆「曾我物語図屏風」について」参照

十一一 同 源氏物語図屏風 (原色刷) 米国 メトロポリタン美術館蔵

紙本金地着色 屏風四曲一双 (各) 縦一六七・〇cm 横三五六・八cm

十二一三 同 桐竹鳳凰孔雀図屏風 (原色刷)

米国 クリーヴランド美術館蔵

紙本金地着色 屏風六曲一双 (各) 縦一六〇・五cm 横三六二・〇cm

一一一三 相澤正彦「土佐光吉と大画面絵画」参照